
灰かぶりの憂鬱

金乃りん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰かぶりの憂鬱

【Nコード】

N9910H

【作者名】

金乃りん

【あらすじ】

幼くして母をなくした少女を、かつての想い人と再婚した父は召使のように扱った。そんな身の上話をあっけらかんとしてみせた少女に興味を持った男はついに追い出された少女に仕事を世話することにした。どんな結末を見せてくれるのか楽しみにしながら…。

プロローグ：灰かぶりは泣かない

「さぼってんじゃないよッ」

罵声とともに飛んできた桶がみすばらしい格好の少女に当たる。

ばしゃっという水音とともに、あたまのてっぺんからつま先まで、見事にぬれねずみになった少女は、のったりと立ち上がり、自分の頭にあたった桶を拾い上げた。

深いため息をついて、なにかを思い切るようにぐい、と身体を上げる。そのまま、きつい視線であたりを見渡せば、傍にいた誰もがさっと視線をそらして足早に立ち去った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふん」

見かけはみすばらしい召使だが、気位は高い、としのび笑いを漏らして、男は少女に近寄った。

「だいじょうぶか？」

意外そうな顔をして振り返ったその顔は、驚くほど整っていた。

くつきりとした少し釣り気味の目はぱっちりしている、綺麗な青だし、唇は小さくて赤いし、鼻はすらりと通って高い。それらが適当なバランスで配置されていて、はつきり言って美少女だった。

優しげな、とか穏やかなではなく、ずけずけと物を言いそうな、きつめの美少女。

「だいじょうぶよ。いつものことだもの」

ばさっと髪の毛のしずくを払って、桶を抱えた少女は井戸の桶に手をかけた。

「この家のものか？」

「ええ」

「この家は羽振りがよいようだが・・・」

じつくりと少女の格好を観察する。

女性としての礼儀であるモスリンどころか、ほっかむりの布さえなく、髪をまとめる紐もなく、背中に流しっぱなしのほつれた髪。

腕も胸元もむき出しになるドレス。

みつともなくひざから下の足がによつきり出るスカート。

靴下さえなく、みすばらしい、つま先が破れ、かかとの擦り切れたボロ靴。

あまり、年頃の少女の格好ではない。

最下層の召使だとしても、だ。

主がもう少しましな格好をさせるだろう。

こういった最下層の召使がどのような扱いを受けているかで、その家の格というものが知れるからだ。

「なにかおもしろい身の上でもあるのか？」

「なあんにもないわ。なんにもね」

あつさりした答えだった。

恨みも、悲しみも、なにもない。いつそあつけらかんとしたぐらいの。

「ならば若い娘がその格好なのは普通なのか？」

「まさか！あなたとこの世間知らず？」

誰だつて一目でわかる。

どんな貧しい家だつて、娘にこんな格好させやしない。

カーテン、シーツを裂いたつて、娘にほつかむりぐらいさせるしスカートは足首まで隠れるぐらいの長さにする。

そう少女が言つと、男は剣をはずしてその場においてあつた薪の上に座り込んだ。

「俺に話してみないか？退屈なんだ」

「あらそう。わたしはお忍び貴族のおぼっちゃまに退屈しのぎに身の上話をしなければならぬの」

そう意地悪く言つと男は快活な笑い声を上げた。

「そうしてくれると嬉しいな」

「はいはい。わかりましたとも」

そんなに面白い話じゃない。

わたしの身の上は昔から伝わるお話と同じ。

幸運にも王子様に迎えに来てもらえたシンデレラ！

わたしにそんなものはきやしない。

だって。

シンデレラには優しい父親がいた。

わたしの父は、母と結婚する前からお妾さんがいて、母が死ぬとすぐに二人の姉と継母がやってきた。

シンデレラには心優しい母親がいた。

わたしの母は気位ばかり高い貴族の娘。妾にだってつらく当たってわたしにも父にも恨み言ばかり。使用人にだって厳しく当り散らしてた。

子供心にも醜いと思ったもの。愛情が離れたって文句も言えない。シンデレラの継母はシンデレラをいじめてばかりの意地悪ばあ。わたしの継母は誰にだって心優しい。使用人たちだって尊敬してる。

シンデレラの姉たちはたいして美人でもなかったし、心が醜かった。

わたしの姉たちはとっても美人！それにお母さんにて優しく穏やか。

それにそれに。シンデレラは美人で心優しく清らかだった。

わたしは美人かもしれないけれど、心優しくも清らかでもない。

気位ばかり高かった母にて、つんとした鼻、つりあがった目、薄い唇、きつい眉にとがった顎。

確かにぱつと見は美人だけど、姉たちは父の穏やかで優しいアイモンドみたいな目や継母のふつくらしたやわらかそうな唇や、ちよつと丸くて愛嬌のある鼻や、優しそうに丸い弓型の眉や、卵形の丸い顔。

どれを取ったって、姉さんたちのほうが良いに決まってる。

その上、その前妻の遺した可愛げのない娘にまで優しいというのだから、文句のつけようがない。

そして、シンデレラのお父さんは、娘が好きだったし、大切だった。

わたしの父は、前妻そっくりの娘が、大嫌い。顔も見たくないみたい。

だからわたしは『ここ』にいる。

「なるほど。お前の顔を見るとみんなその気位ばかり高かった奥様を思い出すわけか」

「ええ！その通り！誰もがわたしと母は同じ人間だって思うのよ！まったく忌々しい顔！

どうしてもっとお父さんに似せて産んでくれなかったのかしら。

「お前は今の暮らしがづらいのか？」

「つらくないわけではないでしょう。毎日朝から晩まで働いて。お給金ももらえなくて。ご飯もろくろく食べさせてもらえないんだから」
そういうと、さすがに男の顔に嫌悪感が浮かんだ。

「・・・それは、お前の母がさせているのか？」

「まさか。奥様は優しいのよ。そんな酷いことするわけないじゃない。わたしはちゃんと食べてることになってるし、服は意地を張っていらなんて言ってることになってるのよ」

何度も新しい服をくれようとしたし、モスリンだってわたしの古いのので悪いけれど、とまだ2回も使っていないような自分用のをくれようとしたり。

こっそり口紅をくれたりもした。

でも、いつだってお父様や使用人たちが取り上げてしまうのよ。
お前にそんなものは必要ないって。

全く、お話とはぜんぜん逆だわ。

「朝から晩まで働くのは嫌じゃないわ。何もしてないよりずっと楽しいもの」

昔から刺繍も歌も楽器も、自慢話ばかりのお茶会も大嫌いなのでなくて済んで清々してるわ。

「悲しいのは乗馬が出来なくなっただことぐらいよ」
あれだけは好きだったのに。

でも、今でも馬の世話はさせてもらえるし、本当に時々馬の背に乗ることだって出来る。

「乗るか？」

ぽんぽん、と自分の隣に待っている馬の頭を叩く男に呆れて返事を返した。

「結構よ。何年乗ってないと思ってるの。それに、そんな大きい馬になんて乗れないわ」

確かに、と男は傍らの馬を見やって、その首を腕を伸ばして叩いてやった。

ねえ、と少女が腰に手をあてて男を見下ろす。

「貴族ってそんなに暇なの？わたしはもう働きにいかないといけないのよ。あなたの酔狂に付き合ってる暇はないの。じゃあね」

「なぜ貴族だと思った？」

「そんなの、見ればわかるわよ。馬鹿じゃないの？」

さっさと桶を振り回すように家に入ってしまった少女を見送って、男は面白そうにくつくつと笑った。

第一話：追い出された少女

質素な食事でありついて、くたくたになって部屋に戻ったのは、深夜を回っていた。

部屋だけは、昔のままだ。

そう・・・母が生きていたころの、昔のまま。

ため息をついて、ベッドに座り込む。

子供用の妙に豪華な、古びたベッド。

母が生きていたころから使っている。

だけど、きらきらしていたリボンは古びてぼろぼろになって、ついていた無駄な宝石は剥ぎ取られ、白いペンキはあちこちはげて、豪華だっただけに、悲しい様相になっている。

取れかけの天蓋の布がぶらぶらとゆれていた。

変な男に出会ってしまった。

質素に見せているけど、上等な服。

綺麗に整えられた髪をわざとぐしゃぐしゃにしたような髪型。

肌だつて、手だつて、きちんと手入れされていて。

見ればわかるのに、どうして貴族だと思った、なんて馬鹿な質問をしていた。

大体、あんな上等な馬に乗れる人間が貴族じゃないわけがない。

あの馬を思うと、うっとりしてしまう。

しなやかな体躯。

つややかな毛並みに、しっかりとしたたてがみ。

目がつぶらできらきらしているのに、どこか気の強さをうかがわせた。

立派な牡馬。

「カッコいい馬だったなあ・・・」

あんな馬が、ほしかった。

もう、自分用の馬はお金がかかるから、と売られていつてしまった。

だけど、馬に乗るのは、爽快で、楽しくて。かなうことなら、もう一度馬には乗りたい。

思い切り走らせて、風を感じたい。

かなわない願いとわかっていても、そう願ってしまう自分を振り切るように頭を振る。

「………寝よう」

明日も朝早いのだ。

水汲み、巻き割り、桶や瓶を洗って、外の掃除をして、馬の世話をして……。

そういえば、自分の部屋の掃除なんていつ以来やってないだろう。誰も入らないこの部屋は、昔のまま豪華なものだけがあって、けれど古びてぼろぼろだった。

かつて、この家のたった一人の娘のために用意されていた、部屋。だけど、あの頃からもうお父様には違う妻と、娘がいた。

「ちょっと」

「……はい」

ノックもなしだが、さすがにドアを無造作にあけることはためらわれるのか、入りたくもないのか、ぶっきらぼうな女中頭の声が外から聞こえた。

「旦那様がお呼びだよ。早くしな！」

珍しい。

そう思った。

顔をみることも嫌がる父に呼び出されるなど、実に久しぶりだった。

「今、行きます」

久しぶりに訪れた書斎には、これまた久しぶりに見る父がいた。

「薄汚い格好だな。少しは考えたらどうだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

させているのは、あなたでしょう。

そんな言葉を飲み込む。

開口一番、嫌いぬいているとはつきりわかる言葉に、ため息が漏れる。

仕方ない。

可愛げのある性格の娘じゃなくてごめんなさい、なんていやみにしかきこえない。

「ご用件は？お父様」

わざと嫌がる呼び方をする。

案の定、父は思い切り顔をしかめた。

「・・・・今日の午後、なにをしていた」

「水汲みを」

桶を投げつけられたんだもの。

「それだけか？」

「庭の手入れと・・・・庭の彫像を磨きました」

「それだけではないだろう」

にやりというその笑いに、嫌な予感がした。

「男と、会っていたそうだな？」

「それは！」

しまった。

「あの方は道を尋ねただけです」

「それにしても随分長い間話し込んでいたと聞いたが」
唇をかみ締める。

油断していた。こんな付け入る隙を与えてしまうなんて。

ここを出て行くわけにはいかないのに。

「でていけ」

じつに、うれしそうにその言葉を告げた。

「おとうさま!!」

それだけは、それだけは許してほしかった。

「お願いです!どうか!!どうか家においてください!!」

おいだされては、なにもできない。

した働きであろうと、みずばらしいドレスであろうと、食事がほとんど取れなくても、関係ない。

ここを追い出されれば、のたれ死ぬか、娼婦になるかのどちらかだ。

「結婚もしないうちから男と浮名をながすような女がうちにいると大事なうちの娘たちまでそうだと思われる」

お前など、娘ではない。

そついわれたような気がした。

「さすがにあの女の娘だな。性根まで同じか」

ぎゅっと、手を握り締める。

かけた爪が手のひらに食い込んだ。

決して、良い人ではなかった。

だけど、それでも、私の、たったひとりの母親だった。

たった一人、私をあいしてくれた人だった!

「お母様を悪く言わないで!あなたの、妻だった人でしょう?」

返事は、冷たかった。

「あの女を、妻だと思ったことなど、一度もない」

足元が崩れ去るような気分というのはこんなことをいうのだろうか。

わかっていたはずなのに、どうしてこんなにショックを受けるんだろう。

「どこへとも行き、勝手にのたれ死ね」

それきり、二度と、その目は向けられなかった。

ただ、合図された従者たちが、私の両腕をつかんで、担ぎ上げる。

「お父様!」

暴れて、引っかいて。

叫ぶ。

なりふりなんてかまっていられなかった。

「お願い！お父様！！」

声も何もかもさえぎるように、その扉が無常に閉じた。

第二話：たとえわずかな希望でも

文字通り身一つで放り出された。

門扉の外まで引きずられて地面に向かって投げ捨てられる。

たたきつけられて痛む腕や膝をさすりながら立ち上がる。

真つ暗な街は怖くて、肌寒さにぶるりとふるえた。

「・・・痛い・・・」

呟いても、誰も手を差し伸べてなんてくれない。

スカートについたほこりをはらう。

ずきずきと痛みを訴える身体に唇をかみ締める。

こらえようと思ってもこらえられなかった涙がこぼれた。

わたしが、なにをした。

こんなにならなきゃならないようなことをしたんだろうか。

ただ、お母様の娘に生まれただけだ。

あの、いつも寂しくて悲しかったひとの娘に生まれただけだった。

父に恋人がいようが、そんなのは父の勝手だ。

結婚を強いられようと自分の思いを貫けばよかったのだ。

それをできなかったからといって、それをどうしてわたしにぶつ

けられなければならない・・・？

そう思えば思うほど、自分がみじめで涙が止まらなかった。

そう思ってしまう自分が、父をかわいそうと思いやれない自分が、

今ここにこうしてみすばらしい格好でひとり放り出された自分が、

ここで泣くしかできない無力な自分が、

みじめだった。

とぼとぼと足をすすめる。

こんなところにいつまでもたたずんでも仕方ない。

絶対に入れてくれるはずがない。

重い足をのろのろと動かしながらどこに行くでもなく歩きだして、十数歩も歩いた頃。

目の前に、昼間の男が立っていた。

「・・・追い出されたのか？」

困ったような、申し訳なさそうな、そんな声だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

黙って涙をぬぐう。

みつともない顔は見せたくない。

せめてもの矜持だった。

「そうよ」

だれのせい、ということもない。

わたしが、不注意だっただけ。

こうなるとわかっていたのに、自分で引き寄せてしまったのだから。

理由はわかっている。

楽しかったのだ。

わたしを見てくれて、話を聞いてくれて、うれしかったのだ。

だから、つい話に興じた。

どうなるか、わかっていたのに。

「ふうむ・・・・・・・・どうする？」

首を振る。

だって。世の中、家族のいない、家のない娘は道を選べない。

どうするもこうするも、ない。

「どうしようもないわ。わたしは、捨てられたんだから」

そういうことなのだろう。

どこへでも行って、のたれ死ね。

どこまでも身を落とせ、とそういう意味だ。

「あきらめるのか？」

「あきらめたりしないわ」

お母様がなくなって、虐げられるようになってから誓ったのだ。何があつたつてあきらめたりしない。

「・・・下働きの口を探すの。貴族の家ににらまれない商家はないから、わたしを受け入れるのを嫌がるかもしれないけれど、この街を離れば口はあるはずだもの」

そこまですりとか食いつないで、隣町まで頑張つて歩く。

この国は治安がいいから、女の一人旅でも危険は少ない・・・はずだ。

「働く場所がほしいのか。ならば用意してやろうか？」

あつさりと言われた言葉にめまいがした。

「あなた、それを用意するのがどれだけ大変だと思つて・・・」
身よりもない、家もない。

まして、元貴族の娘なんて厄介な立場の人間に働く場所を用意するなんて、簡単なことじゃない。

身寄りでもなければなおさらだ。

「あなたにそれを用意するのは簡単だ」

どんな顔でそれを言っているのか。

それは本当なのか。

真意を探るようにその顔を見つめても、その顔のどこにも変化は感じ取れなかった。

「娼婦になる気はないわよ」

「そんな仕事は紹介したくてもできない」

じつとみつめて、ゆらがないう瞳に、頷いた。

「・・・いいわ」

どんな仕事でも、娼婦や物乞いよりましだ。

「どんな仕事だって、やるわ」

野垂れ死になんかしたくない。

私は、生き抜いてみせる。

決意を込めた視線の先で、男はにやり、と笑った。

「いい根性だ。ついて来い」

馬の口を引く男について歩きながら、もう一度手をぎゅっと握る。もし、意に沿わない場所であれば、なんとしてでも逃げる。

女の細腕で敵わなくても、何が何でも逃げる。

そうして、考えていた通りの道を進めばいいのだ。

けれど本当に紹介してくれるというなら、のらない手はない。そんなことを考えながら、ただその後ろについていった。

第三話：デュボワ侯爵家

「と、いうわけだ。彼女をここで雇ってくれ」

「・・・なにが。と、いうわけなんでしょうか？」

えらくきれいな身なりの男が半眼で男をにらんでいる。

つれてこられたのは貴族の邸宅の一角。

その中でもひととき美しく、堅固な家だった。

歴史も美しさも群を抜いている。

それもそのはず、宰相デュボワ侯爵家の家だ。

来たことは無いけれど、その家の様は有名だった。

まして、家の正面に燦然と輝くその紋章を見れば誰にだってわかる。

そんな家に堂々と正面から入っていく男に恐る恐るついてきて通されたのはこの部屋だった。

「そう怒るな」

目の前にいるのは間違いなく、若き当主デュボワ侯爵だろう。

なのにそんな人に随分とぞんざいな口をきいている。

この人、そんなに偉いひとなのだろうか。

身分は高いだろうとは思っていたけれど・・・。

「まあ、俺が言うのもなんだが働き者でいい男だ」

今日であつたばかりです。その上

「女です」

「・・・そうだった」

わたしと男のやりとりに深々とため息をついた侯爵がもつたいをつけてうなずいた。

「・・・ま。いいでしょう」

「すまん、恩に着る」

笑いながら両手を合わせて拝むまねをする男にどうやら私の雇い主になることに決まつたらしい侯爵はわざとらしく盛大なため息を

ついた。

「目いっぱい着てください」

男は、というとなんな嫌味もどこ吹く風といった風情だ。

もういちどため息をついてそのひとは卓上においてあつたガラス製のベルを手に取った。

ちりん、と涼やかな音が意外なほど大きく響き渡る。

ひよつとして、魔法がかかっているのかもしれない。

ただのガラスの鈴がこんなに大きな音がするはずもないから。

「お呼びでしょうか」

扉をあけて一礼したのは、初老の男性だった。

「この娘を連れて行って仕事を与えてくれ」

「この娘を、でしょうか？」

じろりと眺めてくる視線に負けずに睨み返した。

ふさわしくない、と思っているのかもしれないけど。

負けないんだから！

ここを追い出されたらいくところないんだから！

「…名前は」

すこし迷って、もう何年も使われていない愛称を告げる。

「リヨン」

「では リヨン。まずは湯殿にいつて汚れを落とさない。それからお前の部屋に案内しよう」

「湯殿…？」

「当然だ。賓客の前にもでる仕事。身なりは清潔にしておかなければならない」

胸に喜びが満ちた。

湯殿を使えるなんて、何年ぶりだろう。

それに、それに、さっきまでの不安から解放されて膝から力が抜ける。

夢じゃないのだ。

本当に解放されたのだ。

わたしは、身体を売らなくても、物乞いをしなくてもいいし、のたれ死ななくてもいいのだ。

「紹介はできるが、働くのはお前だからな。暇を出されないように気をつける」

無我夢中で頷く。

それしかできなかった。

「よろしく頼む」

ひらひら、と手を振る男にも深々と一礼して部屋を出た。

どれほど礼の言葉を連ねても今の感謝を表すことなんてできないだろう。

よかった。

本当に、よかった。

「それで？何の気まぐれですか？」

面白がるような昔馴染みの視線にいつもと同じにやりという笑いを返して、男はなんでもない、というように手をふった。

「いや。通りかかって話をして、良い女だと思った。途方にくれたからな。少しは面倒を見てやるかと思った」

情でもなんでもなく、ただそれだけだという男に裏はなさそうだと見て取って、侯爵はやれやれというようにため息をついた。

その表情から何かを期待したのだとわかる。

おそらくは、愛妾でも持てということだろう。

「まったく…少しも変わってない…」

「なんだ。変わったほうが嬉しかったか？」

「いいえ。そのままです。」

思い出せる昔の姿はいつまでも輝いている。

それは子どもの頃の思い出だからこそ。
それを共有したものにしかわからない輝きだった。

「で、あの娘をいつまでお預かりして置けばいいのです？」

「あの娘が、一人で歩きだせるまで」

それを見てみたいだけだ。

あんなさばさばと自分の境遇を受け入れて、なお勝気にふんばる女などそうそう見られるものではない。

「ほう」

「いつかはひとりで歩きだすだろう。それまで面倒をみてやってくれ」

「貴族の娘がひとりで生きていくのはそう簡単ではありません」

「貴族とわかるか」

見た目からはどうみても貴族とはうかがえないとおもったのだが。

「あの顔には見覚えがあります。ヴェイユ子爵家のジョセフィーヌ嬢がガリエナ子爵家に嫁いで娘をひとり産んで死んだと聞きました」

「・・・お前には隠し事一つできんのか」

さすがに慚然としてそう言った男は娘が出て行った扉を見やった。

「子爵ともあるうものが、貴族の娘をあのように扱うとは思わなかった。いくら嫌いでも育てて嫁がせれば相応の見返りを得るだろう」

「持参金もつけないんでしょう」

「その辺の爵位やら血筋やらをほしがっている商人あたりにでも高く売りつければいい」

「それができるような性格なら、あの男はジョセフィーヌ嬢と結婚していません。血と家格に妙にこだわった男でしたから。妻が家格を備えていればよかったんですよ」

「そんな貴族がまだいるのか、なげかわしい」

「そんな貴族の娘を我が家で預かるのですか。なげかわしい」

「・・・デジレ」

「なんですか、ユーク」

「お前本当に食えないな」

「いまさらわかったんですか、なげかわしい」

「・・・わかったわかった。お前にはかなわん。これでいいだろう？では頼んだぞ」

食えない男と正面きつて口げんかをする気はない。

幼い頃からなんど負けたか数える気もおきないほどだ。

「かなわないのはこちらですよ」

後ろから聞こえてきたそんな呟きはきれいに無視することにした。

第四話 ガヴァネス（前書き）

2011年2月4日改訂

第四話 ガヴァネス

雇ったはいいものの、とデジレ・ガブリエル・デュボワ侯爵はいささか頭をひねることになった。

没落しているわけでもなく、現役の貴族の嫡子。

誰がなんと言おうと、彼女はあのガリエナ子爵の嫡子で、跡継ぎだ。

ガリエナ子爵はそう思っていないようだが、彼の娘二人に相続権はない。

生まれたときに嫡子ではなく、庶子だったからだ。

だから婚約者も求婚者もつかないのだが、いまいちそれをわかっていないあの愚か者は、この事態をどう見るか。

不当な扱いに怒った跡継ぎ娘が家を出て、デュボワ侯爵家に助けを求めた。力を貸すことを決めたデュボワ侯爵は彼女を預かり、正当な権利を主張するためにガリエナ子爵を退位させようとする――。

そうなってくればまだましだ。

「やはり、愛人にしようと考えている、が一番有力だな」

このまま家に住まわせればそのうわさが立つのは間違いない。

だが、あの方から預かった以上、放り出すわけにもいかない。

「本当に、次から次へと厄介なことを……」

今回ばかりは少々頭が痛かった。

愛人という噂に思うところはあるかもしれないが、それぐらいの意趣返しは許されるだろう。

そう判断して、彼女を雇うための書類にペンを走らせた。

「給金は月に金貨2枚。金貨でほしいですか？銀貨でほしいですか

？」

「銀貨と銅貨でお願いします」

「住み込みなので、月に銀貨15枚いただきます」

「はい」

「風呂は2日に1回。服は仕事着を2枚支給。半年に1度申請できます。代金は銀貨1枚」

「わかりました」

「食事は一日2回。食堂で」

そこまで説明してくれたところで、鈴がなった。

壁にひもをつけてぶら下げられた鈴の一つを手取る。

「はい」

鈴、と思ったのは、通信機だったらしい。

同じ室内であればどこでも話すことのできる道具が存在するといふのは聞いていたが、見るのは初めてだった。

「はい……は、しかし……」

なにか問答しているようだが丁寧な言葉遣いだ。

ひよっとしたら、デュボワ侯爵なのかもしれない。

となれば手持ち無沙汰だが話の邪魔をするわけにもいかない。黙って待つしかなかった。

ややして鈴を置いて振り向いた執事がため息と共に思いもかけないことを言い出した。

「……あなたの仕事内容が変わりました」

「はい？」

下働きじゃなかったのか。

いや、下働きにしてはあまりにも給金が破格だから女中かもしれなかったが。

「あなたのお仕事は、お嬢様の家庭教師だそうです」

「……はあ！？」

あまりにもめまぐるしい一日すぎないだろうか。

ついていけない頭で、それだけをかるうじて思った。

(換算 金貨：5万円 銀貨：2000円 銅貨：100円
金貨1枚〃銀貨25枚 銀貨1枚〃銅貨20枚)

第五話：格の違い

目覚めはいつもどおり、すっきりとしたものだった。

窓から入ってくる光はキラキラと淡い。

いつも起きているのと同じ、夜明けから間もない時間の光。

「朝食をお持ちいたしました」

入ってきたのはお仕着せらしい紺のドレスに身を包んだ女性。

「ベッドでお召し上がりになりますか？」

「いえ、テーブルでいただきます」

小さなテーブルの上に朝食の用意を終えたメイドが小さく膝を折ってから退出する。

こんな生活——何年ぶりだろう。

母が生きていたときはワガママも言ったが…いや、むしろワガママ放題の娘だったけれど。

こんなのが当たり前だと、そう思っていた。

いただきます、と手を合わせて口に運んだ食事は、とても美味しかった。

考えてみれば…2日ぶりぐらいのご飯だ。

お腹は空きすぎて空腹を訴えなかったけれど、いまさらながら、とてもお腹が空いていたことに気づいた。

食事の後、姫に紹介すると服を与えられて部屋から連れ出された。他家を初めて見るわけではないけれど、今までみたどんな家よりも、デュボワ侯爵家は豪華だった。

整えられた一流の調度品。

美しい絵画や彫刻。

敷き詰められた華やかな模様入りの絨毯とモザイクタイルで整えられた室内。

そのどれもが磨き上げられ、美しく輝いている。

見渡してもチリひとつないほどに整えられた室内は侯爵家がいかに裕福か、あらわしているようだった。

それに、さきほどから使用人の姿がほとんど見えない。

これほどの家であれば絶対にたくさんいるのに。

客の前に不用意に姿を現さないように躡けられているのだろう。

自分の家なら、客の前に使用人がふらりと現れてしまうことなどよくあった。

そのたびに躡けが行き届かなく申し訳ないと謝る父の姿があったのを覚えている。

小さな時はそれでも使用人たちをなんておろかなのか、と思っていたが、いざその立場になってみると良くわかる。

客が来るかどうかなどどうでもいいし、主人の対面などどうでもいいのだ。

さらに、ここを通ってはいけない、通ってよいといった決まりが無視されても誰も気に留めないし、注意もしない。

注意されないから自分が便利なほうがいい、と動いてしまう。

そこに主家への忠誠なんてない。

それを、家の格と呼ぶのだと、まざまざと思い知らされたような気がした。

さすがはデュボワ侯爵家。

名門中の名門と呼ばれる家だった。

前当主はかつて宰相を務め、現在の当主であるデジレ・デュボワ侯爵は王の側近。

歴史も深く、国内で最も広く名前を知られた貴族だろう。

そんなところの姫君の家庭教師？

さすがに無理があるのではないだろうか。

侯爵家のお姫様はにっこりと笑われて実に優雅なあいさつをされ

た。

腰をかがめて、会釈する貴族の令嬢として完璧な礼だ。

「はじめまして、先生」

その言葉に、自分が家庭教師として雇われたのだとわれに返る。

「よろしくお願いいたします…今のわたくしの礼はいかがでした？」

いかがでしたと問われても、完璧以外の言葉があるはずがない。

「すばらしい礼でしたわ、姫様」

「シャルロットとお呼びください。先生」

先生、という言葉のたびに鼓動が弾む。

うれしくないし、楽しくもない。

先生と呼ばれるようななができるだろう。貴族の令嬢として教育を受けていたのは、母が亡くなるまで。その後やってきたところといえば、下働きばかりだ。

パンは焼けても優雅にお茶を淹れたりできないし、掃除や洗濯はできても召使の管理はできない。繕い物はすっかり得意になったけれど、刺繍なんて何年もしていない。

香水のみたて、ドレスの仕立て、絵画に音楽…貴族の令嬢に必要な教養はどれも身になどついていない。

どうしよう、といまさらながら、困り果てる。

教えられることなどない。この姫のほうがすべてにおいて完璧にこなすだろう。

これは、早晚クビになってしまう。ようやく仕事を得ることができたのに！

そう悩んでいると、ころころ、とかわいらしい笑い声がした。

「先生としていらしていただいているんだもの。先生とお呼びしなければならいのですわ。お許しくださいね、お姉さま」

「姫様、失礼ですが…いま、なんと？」

「お姉さまとお呼びいたしました。きつと近いうちにそうお呼びすることになるから、と…違いましたの？」

「と、とんでもございません！」

あの侯爵さまの妻になるなんてとんでもない。どこからそのような発想が出たのかしら。

「でも…昨日、お兄様がつれていらして、わたくしの家庭教師におっしゃられたと…きつとご身分が違つてすぐには結婚ができないけれど、国王陛下はお兄様にお優しいからきつとご許可をいただける、その間に誰かにさらわれてしまわないようにわたくしの家庭教師としてこの家に住んでいただくのだと…違いますの？」

「違います！わたくしは仕事に困つていたところを侯爵様に雇つていただいただけですわ！」

あまりに動揺したせいか、姫様の言葉遣いが写つてしまったのにさえ、やつぱり、と納得される。

やつぱりどころか、昨日まで下働きとして何年も働いていて、その上実家を追い出されただけだというのに、なんて恐ろしい話になつてしまつているのだらう。

「まあ…そんな否定なさらなくても」

「姫様、そのように下世話なお話をなさるものではございません。デュボワの姫君ともあるうお方が…」

「あら。みんなと同じようなことをおっしゃるのね。わたくし、先生とそのようなお話はしたくありませんわ。したいのはもつと楽しいお話。ねえ、先生？わたくしに外の世界のことや、人のことや、恋のことを教えてくださいませ」

「恋…に、人のことですか…？」

恋…それこそまつたくの無縁だった話。

「ええ。お兄様とどこで出会われて恋に落ちられたの！？恋つてどうして落ちるつていうのかしら？」

だから……ちがうつてば。

侯爵家の深層の姫君は、ずいぶんと思ひ込みの激しいお姫様だった。

第六話：姫君の悩み

「先生はどちらのお家の方？」

「わたくしは家を出た身です。どうぞその質問はお許しを」

久しぶりに使う貴族の言葉は舌をかみそうだ。

長つたらしくて遠回しでいらいらする。

「でも貴族なのでしょう？」

「…ええ。一応は」

一代貴族とも言われる准男爵、地方の一町長とも言われる男爵と違って子爵家は伯爵の代理も務められるれっきとした貴族だ。…それほど地位が高いわけではないけれど。

「お兄様とはどちらで知り合われたのかしら？」

「姫様…」

さつきから隙を見てはこの質問だ。

答えようがない質問ばかりで困ってしまう。

本当に昨日であつたばかりで口をきいたこともない。

「じゃあ、先生にとっておきの秘密を教えてさしあげるわ」

「はい？」

「わたくし、もうすぐ隣国の王家に嫁ぎますの」

思わず目を見開いていた。

「なぜ侯爵家の娘がとお思いでしょう？」

こくこくとうなずくとふふと笑ってメイドが煎れた紅茶を口にす。その仕草も優雅なものだ。

「本来なら王族に嫁ぐのは王族と決まっていますもの。まして当代は陛下にはお二人の姉妹がおいでです」

数年前に即位された国王陛下はまだご結婚されておらず、ご姉妹がいらっしゃる。

御年24のオルガ・ソランジュ様と御年16になられるミシユリ
ーヌ・コレット殿下だ。

「わたくしだってなぜと思いましたけれど、姉君のオルガ・ソランジユ姫様は新しく任ぜられた宰相閣下に嫁がれましたし、妹君のミシュリーヌ・コレット姫様は《塔の魔法使い》に嫁がれることが決まりましたわ。どちらもすでに国益に準じた嫁ぎ先が決まっております。そこでわたくしにお話が回って参りましたの。もうすぐわたくしは国王陛下の叔父君の養女として隣国に嫁ぎます」

そういう侯爵家の姫君は16のはずだった。

「あちらの国王陛下は今年35歳になられるんですって。なくなられた先の王妃さまのお産みになられた王太子殿下と王女殿下がいらっしゃるそうよ」

「さんじゅ…っ」

それではほとんど親子ではないだろうか。

貴族としては珍しくないとはいえ、こんな年齢の姫が嫁ぐ先としてふさわしいのだろうか。

「だからね、その前に心ときめくことを探したかったの。それがお兄様とお姉様の恋ならなんてすてきなんでしょうと思いましたのよ」
思わず同情しそうになってから、ふと思う。

「姫さまの嫁がれるのは王家のどなたなのでしょう？」

「あら」

姫君の目がまんまるに見開かれた。おもしろがるような光を満面にたたえて、にっこりと笑う。

「わたくしが嫁ぐのは御年18の王太子殿下よ」

やっぱりと肩が落ちる。

危うく同情するところだった。

「さすがにだまされてくださいませんのね。おいしいわ」

「姫さま…」

「だって、今朝になって突然お兄様があなたを家庭教師だなんておっしゃるんですもの。なにか理由があるって思っるのが普通ではないて？」

それは、そう思う。

誰だつて不審にも思うだろう。

「侯爵様の知り合いの方からこちらをご紹介いただきました」

「あら、普通なのね。つまらないわ」

そんなに波瀾万丈でもしろい話があつてたまるもんですか。

だいたい、どうしてお姫様の退屈しのぎを提供しなければなら
ないの？

「姫様。わたくしの方がお聞きしたいですわ。姫様は何を教わりた
いとおっしゃいますの？わたくしを家庭教師とされたのなら何か教
わりたいことがあるのではな…ごさいません？」

なんだつてこんなところでこんな話をしなければならぬのだろ
う。

水くみや掃除をしている方がずっとずっと楽で、性にあつて
るの
に。

貴族のつきあいなんて大嫌い。

でも今は早く解放されたいと願うしかないようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9910h/>

灰かぶりの憂鬱

2011年2月4日16時40分発行